

誰が宇宙をシミュレートするのか？

冲永宜司

本発表では、近年盛んに論じられるようになった宇宙のシミュレーション仮説について、本年度の大会テーマである「自然」と「技術」という観点から考察し、このシミュレーション宇宙を動かしているものは誰か、という問いにつなげる。

近代において自然は物質的な実在であり、私たちから独立した客観的な対象である。しかしこの仮説は客観であるはずの自然が、実は私たちの表象世界、スクリーンに映し出された世界に他ならないと見なす。これはコンピュータの処理能力が私たちの思考の能力を凌駕するシンギュラリティを経ることで、私たちの意識の方がコンピュータと一体になりそこに制御される状態がもたらす世界である。この考えは自然を表象的な実在と見なすことで、従来の客観的自然観を覆す衝撃を持っている。

またこれまでの技術論では、人間が欲求を効率的に満たすために自然を制御する技術を用いた結果、技術の方がひとりで暴走してしまった、よって自然科学や技術の暴走を抑制するために倫理的規範はいかに役立ち得るか、という議論が中心だった。しかしシミュレーション仮説では翻って、技術の究極までの自己拡大を仮定した地点から私たちの世界を振り返る。そこでは技術が身体的欲求を追求し、倫理がそれを抑制するという従来の構図が内側から転換する。なぜなら意識がコンピュータとなり欲求の出所である身体が無機物化することで、それまでの欲求の質が根本的に転換し得るからである。

そこで本発表では、まず近代において客観的な実在と考えられている「自然」、そして「技術」概念に対して、ある種の表象説や観念論の復活でもあるシミュレーション仮説が妥当性を持ってきた理由についての考察から始める。一見奇抜なこの理論は、科学技術が進歩した時代に初めて出てきたものではない。プラトンの洞窟の比喻や、沈既済(8c)の「枕中記」で盧生が自分の一生を僅かな時間の夢で見尽してしまう話などは、私たちが対面していると思っている物理的世界の方が架空であり、より実在性の高い世界が別に存在するという古典的議論である。またデカルトの方法的懐疑も、現実がシミュレーションである可能性の論理的な排除不可能性を示すものだった。この懐疑は否定されたが、その際デカルトが当時では説得力があった「神の誠実」を根拠にしたように、近代以後に説得力を獲得した経験的事実によって反対にシミュレーション仮説の妥当性を唱えたのがポストロム(Nick Bostrom 1973-)やティプラー(Frank J Tipler 1947-)などであった。

さらにフェルミ(Enrico Fermi 1901-54)のパラドックスでの、宇宙人と出会えないことが不思議であるという問題提起、その後のドレイク(Frank Drake 1930-)方程式による宇

宙の知的文明数が思ったよりきわめて多いことの推定、また人間原理による宇宙が非常に人間に都合よくできていることの発見などは、シミュレーション仮説の蓋然性をより高めて行く論理的根拠になった。またムーア(Gordon E Moore 1929-)やカーツワイル(Ray Kurzweil 1948-)が唱えた文明のある時点からの情報処理速度の急激な増大は、ひとつの文明だけでも、処理速度を増し続けた結果宇宙全体へ達し得る AI の姿を示している。しかもドレイクに則ってこうした文明が無数にあり得るならば、すでに宇宙がシミュレーションだという思想はさらに補強される。

無論、シミュレーション化自体への疑問や、身体を持たない意識の欲求は転換しないという意見も存在する。まずコンピュータの統語論的演算は、人間の志向性を含む意味論的思考を担い得るのかという問題について、両者を区別するサール(John Searle 1932-)と、それに批判的なカーツワイルの議論を追う。さらに演算と意識は別物であり、有機物の意識が無機的な機械にアップロードされ得るのかという問いに対しては、ヴィンジ(Vernor S Vinge 1944-)による、BMIの発展が人間の意識の働きとコンピュータのそれとを緊密にさせ、やがて消滅させるという議論を追う。

また機械化された意識の欲求は転換するのかという疑問は、技術拡大の主体であった有機的身体の欲求が身体が無機物化によって変わり得るのか、意識がそれまでの「技術」自体になることで、「技術」の役割がいかに転換するのかという疑問でもある。そこで、「技術」が有機物の欲求から無機物のより昇華された欲求に転じるとするティプラーの思想と、反対に処理速度の増大が無機物化された意識同士の闘争をさらに過激化させると見なす思想とを対置させる。

それでもなお、シミュレーション宇宙ではなぜ物質よりも表象や意識が根源であり得るのかが問われる。そこで意識と物質とを等根源的に見て、意識をそれ以上の根拠のない実在とする議論を参照する。根拠を遡れない実在の姿は、あらゆるところが中心でありかつ周辺でもある存在論的な構造によって描き出される。ここから、誰かが外部から操作するのでもない、それ自身において展開するシミュレーション宇宙の姿を確認する。